

しかしまあ、おじさんお婆さん的にはこれからのことも考えないといけません！

「ふざけるな！ 貴様が桐生だということはわかつている！ おとなしく星屑を数えなさい！」
なんだと？ 貴様！ 私が主人公としての準備段階を知らないのか！ だからだろうなあ！
私が始まり宣言をしたということを羨ましがっているのが貴様だということだ！

「長い！」

はい、とういませーん！ 私が悪うございました。

「ということで今回も謎の運命論に従ってヘルメス文書とヘルメストギストメトスだっけ？」

わかんね。

「わかつてちようだいよう。ちよつとぐらいはおしえてくれりゆ？」

やだ。

「そんなわがままな大人に育てた覚えはありません！ 覚悟しろ！」

何を打！

「はじまりはじまり〜」

やっぱり唐突だよお！

ということが始まりました、「僕と君の物語、知らない顔して大人顔！」でございます。解
説は地の文さんがお送りします。

「ぱちぱりん〜」

はい、今回はゲストに来てもらっています！

「そうなのか！ ゲストは誰ですか？」

こちらの方です！

「おお！ まさか、あなたが友得さんですか？」

はい、こんにちは、声優業している友得デース。

「こんにちは、今回は、こちらの友得さんの声優をご覧になつてもらいたいと思います」

おお、そうか、儂にも今回のラジオに参加できたんじゃないやなあ。儂はペガサスに乗っていきたいのじゃよ。

「素晴らしい！ ペガサスの表現を演じている参加していた言葉を尽くせなかったという物語ですね？」

イミフ。

「儂には残らない、故に言葉あり」

おお、名言が飛び出しました！ 「この前までの信号機　〜香りだけは逃すな！〜」の最終場面の名言ですね？

「イミフ」

あの名言で友得さんのファンが増えたという隠れ情報が当時世間を騒がしていましたが、友

得さんの的には何が印象的ですか？

「隠れ情報って世間賑わすの？」

儂はなあ。恐らく、この世に残る衆生を地の獄へと導かなければならぬ。この世にて在りはしない泡沫の世界に飛んで行く鳥が美しく見えたのも恐らくは、儂の言葉の残りし想いじやろう。なら、行かねばならぬ。

「なるほど。それでは今回、なぜこちらのラジオに参加しましたか？」

儂にもわかっておる。儂ももう、古希の祝いに参加するほどの年齢じや。じゃからな、お話をこの世に残しておこうと思つてな。

「ほう。何故ならば、私も声優ですから」

どうした？ ↑ディレクター。

「儂はもう、とつくに想いを果たしたのじや。じゃから、星屑の向こう側にあると呼ばれている超銀河に光の速度で行かねばならぬ。そしてこれからのことを思い出していく。そしてこのお身を使わなければならぬ」

あなたは、もう、長くは、ないのね。それぐらいしかわからない私を赦してください。

「ああ、儂の星屑は破局星なのじや。じゃから、行かなければならぬ。欲しい想いよ。この身に宿さなければならぬ想いをいつか、お主に届くと良いな」

私にもいつかの星屑を見上げて嘆息したあなたの言葉を思っているわ。そして私もいかなく

ちやいくないの。

「共に行くとしたら、どこが良いじやろうなあ」

どこが良いのでしょうねえ。でも、でも。

「一つだけ想いが残っているとしたら。「僕と君の物語、知らない顔して大人顔」に帰らなければならぬのかもしれないね」

だから、私は思った。

「今日も、空は晴れていた。白い雲が流れている日常に」

乾杯、と。

「そしていずれも思い出すことがなかったら——。そしていつかを思い出すことがなかったら——」

そのときはまた、共に行きましょう？

「あなたと私が出会った、最後の場所」

そこが。

「私達の本当のラジオ番組の収録だから」

行こう、未来へ。

「戻らない過去を、見つめないで」

だって。

「儂たちは」

夫婦なんだから。

「……」

……。

「カットオ！」

あの星屑が落ちる前に私は帰らなきゃいけないの。

「知りません。というかどこに帰るんですか」

あの星屑が落ちた後ではもう遅くて……。星屑なんて知らないソリチュードな君は嫌いだし！
「とりあえず、君は何を言っているんだい」

ソリチュードを知らない君は嫌いなんだ。だから星屑なんだよ。

「意味がわからないという単語は知らないのかい？」

いやあ、知ってはいたんですけどねえ。最近とみに考えることが多くて。

「ええ!? まさか、私の星屑のソテーを食べたかったの？」

知らないんですよねえ。星屑のソテー程食べたくなるものは一切記憶の奥に封じ込める運命の宿命！

「知らん、というか、訳のわかる話をしてくれ」

英訳なんて知らないよ。僕は僕だけの世界で君に語っているんだ。

「田から伝わらない。だから伝わる。それ故に人は応えるのでした」

知らないという言葉は君は知っていたのかね？

「あの星屑がどこに在るのかももう知らないんだ——」

知らない、ということすらも嘘なんじゃないかと疑うほど、君は。

「知らない君の名前を思い出しても意味がない。それ故に」

君を愛するということを忘れたのね。

「ああ、僕だけの世界線のなかで君を閉じ込めることが出来たら」

それはどれだけ幸せになれるかを教えてくれたような気がしたんだ。

「そして、いつか、僕と君が結ばれる時。そのときは、二人で約束した僕と君の物語を始めよう」

いつか、知っていたことを全て話して。

「そう、眠りに落ちるその瞬間まで語り尽くそう」

ちなみに、ここはある歌詞に似ていますね。

「そんなことは知らない。それほど意味がない。それほど、僕たちの意味すらも、知らずに」

そして僕たちは眠りに就いた。

「おやすみなさい。そして永遠に起きることなく夢を見続けなさい」

ああ、僕と君はつながっているんだ。

「それほど、絶望に沈み込む人しか今も観ていない」
気付けば、空が明るい。

「そこに、眠るまで語った人は」

誰もいなかった。

「誰もいない静寂の部屋に」

ノックが響いた――。

さて、君ヨ。

「君ヨ？ 君じゃないんですけど」

ええ、そうだと思いますよ！ リバースカードオープン！ 速攻魔法！

「君ヨ。君よ。組ヨ。僕はそこにはいない」

ソウナノ？

「そうです！ 星空とは綺麗に見えるものです」

そうなの？ そうなのねえ？ へえ、そうなんですか。

「私は狂っている。星空を見飽きるほど見ても狂っている事実を否定することは未だできず、僕たちは」

いや、今、あなた私と言ったでしょ。なんで、僕たちって言ってるの。

「狂っているからだよ？ この説明をすることが出来るということは狂っていない証明だ！」
では、こちらに判子を押してください。

「はい。ぼくの判子だよ！」

では、こちらに判子を押して。

「はい！ わたしの判子だよ！」

では、ここに判子を押す。

「はい！！ これらはぼくたちの判子なんだ！」

だから、判子を押して。

「うん！ ここから向こうまで続いている郵便局までの距離の中にある判子もぼくたちのものなの！」

いいから、判子を押せ。

「うん！！ あのね「葉よ押せ」すいません」

全く、君はヴァントと契約をしなかったのかね？

「ああ、確か、そのときは判子を押し忘れて契約できなかった。でも、イバーにはエクスカリバーは貰ったよ？」

いや、なんか、著作権的なものが結構香り高く匂うのだが。

「大丈夫！ 一部分を削り取っているから、わかる人にはわかる仕様だからね！」

じゃあ、言うけど、ランサにはゲイボルクを貰ったのかね？

「知らん！ 私は彼を愛しています」

何を言うのだろうか。彼は私を愛してくれないのかなあ？ 星空なんて嫌いだ！ と彼はよく言っている。

「何を言っているのか、我にはわからぬ。そしてこの星空には産まれていたのがあるのだ！」
やはり、意味不明ですねえ。

「おうよ！ 私にはわからぬことなんてないからな」

我とは言わぬのか？

「吾に従いしおとなしい少年なぞ興味なんざない。それに君ほどではないのだよ」
そうか、その手段を使う時、この界限が全て崩壊するだろう！

「き、貴様！ 何をする気だ！」

カタストロフだ！

「な、なんだってー！」（二重音）

なんだ、二重音って。

「な、なんだってー！」

カタストロフだ！ とにかく、日本語というものが存在するらしいが、その国ではてんぺん

ちいと名付けられているらしい。

「な、なんだってー！」（棒読み）

星屑が落ちてくるだろう？ あ之星が、火災球を持っている。貴様には最早、生きる術はない！

「だけど、僕の本当の力を使えば、あの星空を舞っている鳥たちを見過ごすわけにはいかない！」

どうした？ 喚け、泣け！ そしてちぎってはなげ、ちぎってはなげるんだな！

「でも、僕の本当の力を使えば雷神様がお怒りになる……。僕たちはどうすればいいんだ？」
はっはっは！ 我の予言通りではないか！ 所詮人間というものは斯くも虚しいものなのだ！

「少年、お主の本当の力を使って愛嬢を笑わせなさい」

あ、あなたは！

「お主はステキな方だと知っている。だから、我は敵わぬ者を戦う時に封じたその想いを使えばいいのだ」

わ、わかりました。あなたは、やはり……！

「愛嬢が泣いたら元も子もないからな。さあ、力を開放するのです！」
はい！

「ねえ、おばあちゃん？ おばあちゃんってば」

おお、すまないね。話の途中だったね。すまないね。

「それで星が落ちてきたんだよね？ 僕って呼ばれた人は結果的にどうなったの？ その雷神様に従った人たちはどうしたの？」

さあねえ、昔の話だから、ここまでしか覚えてないからねえ。

「ええー。ズルいよ。ホントは覚えているんですよ？ ズルいズルい」

仕方ないのよ。それよりご飯よ。おばあちゃんも、懐かしい話をするわね。

「そういつたお母さんは頬に深い傷を残していた。でも、その痛みを感じることが幸せと考えていたのは不思議ではないのだろう」

はあい。また今度聞かせてね、おばあちゃん。

「ああ、そうだねえ。今日も中途半端な場所で終わらせてごめんねえ」

そうして一家がまた団欒していた――。

さて、諸君らよ。

「どうした」

君たちが望んだ言葉というものが存在するらしい。私には何のことはさっぱりわからないのだがな。

「それがどうした。君と呼ぶからには呼ぶのであろう？」

いや、いいんだ。君が知らないことも含めて三千里。

「知らん。というか、画期的な発想が浮かんではしいと素直に言っても良くて？」

いやあ、そういうわけには素因数分解方程式を咲く曲刷る訳には逝かないのですぞ。

「何を言っているの？ おじいちゃん、とっても偉大に見えるですう」

キモい。そして気持ち悪い。それ故に気持ち悪さがある。はい、これはテストに出るのでしつかり覚えておくように。

「一切合切を否定する。おじいさんはとてもショックだそうです。だから二点のダメージをブツシュしましょう」

わかりません、勝つまでは。

「欲しがれ！ 時よ！ 宇宙よ！ 空よ！ 大地よ！ 全てはエビの為！」
欲しがりません、エビだけは。

「いや、もらってちょ」

ちょんまげえ。

「ちょんまげ」

うん。

「うん、虚しいな」

うん……。

「とりあえず、コンビニ行ってくるけど何円要る？」

なに、コンビニ強盗すんの？

「するわけあるか！ そんな生易しいことを」

いや、それ以上にヤバイことするの！ ダメだろ！ 人的に考えろ！

「いやあ、照れるなあ」

褒めてねえし、話題にも出さな！ それだから、貴様は秋葉原と呼ばれるんだよ。

「いや、私は秋葉原に住んでいますよ？ だからですよ」

空を見る！ ほら、飛行機が飛んでいるだろ？ ぴよんたみたいにな！

「ぴよ、ぴよんた？ なにゆえ？」

ぴよんたの伝説！ 海を渡る、三つの方法！

「色々と危ない！」

大丈夫、クローバーなハートは知らない！

「ありふれた幸せで良いの！ 美月い——！」

誰——！

「それは、必然でなんとかかんとかあ！」

おまえ、今、絶対に動画サイト見てるだろ。

「一分前ぐらいに」

大丈夫。君は法外的な値段を要求しない限り止めることはないだろうなあ。

「すみません。えー、私は、動画サイトがこの世に存することすら知りませんでした。誠にフランスに居る方に謝ります」

万里ちゃんが真美恵ちゃんに！

「誰?!」

ところで、君はD.C.ゲームというものを知っているかい？

「ところもなにも、知っているよ」

それが全ての結末だそうだ。だから、君に教えなければいけないのだよ。

「ほう。それはとても興味深いですね、京子様」

君が誰かなぞわたくしめが知る必要なんぞないがな。だが所謂、宝石箱と君の関係性はD.C.と同じだろう。

「つまりは繰り返すのですね。わかります」

干しなんて見る必要がないぐらい、泣いていた少年の涙が、止まらない世界線にて、どうぞ

「知りませんよ。知っている方が不思議なくらい知りません。星屑が干されてしまうほどに知りません」

ええ。そうですよ。僕は億千万ですよ。

「おつくせんまん！ 歌詞なんて知らねえぜ！」

知つとけ。でも、ホントあの日を思い出すよ。

「そう、あれは夏の日のことだった」

私が、フランスにいるときのことだった。

「私も日本にいるときのことだったよ。少年は覚えているのかい？ 少年が世界線に辿り着いたとき、真冬並みの寒さを知っていた時のことだよ」

私はフランス語がとでも下手くそです。

「少年はとにかく起こっていた。怒っていたのだよ。だが、漢字ミスとは憑き物。少年は別の言葉で表現されてしまった不遇な神政権の上で行われてしまったのだよ。少年とは憑き物。だからwらだwよ」

笑わないで。

「でも、少年は勝訴した。少年に負けた人は恨み言に全力を籠めた。そしてなんと、少年にあることが起きてしまった」

少年はなんと！

「少年が青年になったのだ！ これほどの驚きを誰に伝えたら良かっただろう。だって、誕生日になっちゃったからなあ」

確かに。少年が青年になった？ そんなことがあるわけがないじゃないか。だが、それが真

実だということにも気付いてしまった。

「仕方ないが、少年が青年になったことは誰もが周知の事実だったのだ。だから、私も彼を支えるようにしたわ」

君も、あの青年を恨んだのかい？

「はい。青年の止めを刺してやろうと思って。だから、私も怨み言に全力を籠めた。だから、私も笑いましたよ」

どうしてだい？

「それはですね。青年が成人になってしまったんだよ。これほどの驚きを誰に伝えればいいのか。しかもですよ？ 誕生日に成人になってしまったんだからですよ」

ちなみに成人さんは成人式に参加したのかい？

「ああ、もちろんだ。当たり前のことを言わせないでくれませんか？」

すまない。だが、それは……。

「わかっていますよ。私には止めることができなかった。だけど、私の想いが通って成人になった。それだけで充分幸せです」

それは……。うん、ある意味止めない。

「しかし！ あの人は信じられなかった。あの人が怒ってしまい、あの人は藁人形を持ってきて五寸釘を持ってごっすんごっすんしていたのです。そしてウラミゴトを重ねて、念入りに重

ねて、全力を籠めたのです。だから、あの人も笑っていました。永い時間を使ってあの人が先に終わってしまったんじゃないかぐらいの永い時間を使って笑ってしまったんですよ」
なんでって聞く方が無駄かもしれない……。

「それはですよ。成人さんが夫婦になったんです！　ふざけた人が愛しているとか言ってるに人生を託したんです」

あ、やっぱり。

「もう、これほど、面白いことがありますか？　信じられませんでした。だって」
だって？

「普通の人生をただ、歩んでいるだけですから」

それ言ったら終わりじゃん。

「その後夫婦は子供を産み、同じように子供を恨んだらしい」

つまりは、メビウスの輪！

「YES!」

ということが始まれ！　ラピスラズリ！

「そのネタがわかる人は多分いないぞ！」

私はクローバーなハートを捜しているんですよ？　なら、大丈夫！

「だかだん、じゃじゃーん」
なにそれ。

「いや、ある曲の出だし」

それを文章で表現した結果としてそんなことになるのね。

「だって、ねえ？ 音符なんて使って書いたら、それ最早、楽譜だし」
いいんだよ、わかりやあ。

「それ、ぼくちんの台詞でやんす」
やんす。

「やんす。ところで思ったのだが」
どうしたでやんす。

「儂はうぬに申し上げなければならぬ儀がございます」
誰でやんす。

「お主。臣、孝宣、申す」
パクリでやんす。

「いや、だって囚われた人なんていないでしょ」
そこで遊んでいるおなごがいるでやんす。

「うつふつ。僕と卑劣な戦いをしている奴なんて知らなんだでござりまする」

とりあえず、うるせえでやんす。

「やんすやんす、うるせえぞ！ 黙らせろ！ さもなくば玄関口から靴を履くぞ！」
それぐらゐは赦すでやんす。

「やしー」

やし？

「いーえーうーい」

ああ！ そんな逝けないことをしてしまったのは我でやんすな？

「いええーえい！」

ちよつと違う。でもね、僕は思いましたのです。

「どうしたんだい？ 君がそのようなことを言うとき必ず星が落つるときなのでは？」

そのネタもわかる人がいるのかどうかですけど、それでも僕はやるんです。

「何をするのかすらもわからないこの平行世界で僕たちと君たちは結ばれる。その一瞬のカメラで何を求めたのかな？」

ここの身体も、もう遅かったか……。

「例え、この世界に対しての空力摩擦を使うとすると四の値から調べなければならぬ」
良いカードだ。

「いやあ、そんなことをするお嬢さんだとは知らなかったよ。それこそ、世界が求めたものを

君が望んではいけない、という琴だったのか」

私は君ヲ赦すことハ出来ナイ。

「ああ、君が望んでしまった未来はそんなにも儚くも虚しかったのね。そして笑顔になるたびに見ていたあのことは最早……」

そして僕たちは――。

「あの日のことを思い出せと言われてももう無理だ。だけど感触だけは覚えている」

私と君たちを結んだあの約束した手の平は今でも。

「胸に刻まれた言葉と共に」

覚えているのです。

知らねえよ！

「うっせえ！ 繰り返すぞ！」

今、一瞬伸ちやんがいたぞ！ だから、バナナの皮を投げろ！

「うっせえ、うっせえ。でもこの先は言わない！ ことを約束してやる。だから、知らねえもんは知らねえんだよ！」

ああ、そう言うと思つてのリバースカードオープンである！

「なんだと？ 貴様、正気か！」

そうだ。このランプにはキングが描かれている！

「な、なんだってー！！」

そしてさらに、この世とは思えない、美貌に恵まれたヴィーナスが描かれている！

「な、なんですとお！」

最後に、ポーカーなんて使う予定なんじゃないですよん！

「知らねえよ。貴様は多大なる戦いを我に挑んだ。その覚悟はあるのか！」

ない！

「いや、あるって言つてよ、そこは」

ええー、やだよ、めんどくさい。

「言うぐらいはしてほしいのは気のせいかな！」

気のせいだ！

「してるじゃねえか！ あと、俺は小さい、え、を使いまくってる自分が情けない！」

そんなことは知らんがな。私に期待された少年はいつまでも終わることのない輪廻に入っているのだ！

「あら大変ね」

だけど、彼は言った。僕の言葉を彼女に伝えないと。

「どうしたの？」

彼のことを思い出そうともしない彼女は笑った。もう、隣に僕の知らない誰かがいた。もう、信じれなかった。だから、もう。

「もう、言い過ぎよ。違う言葉を使いなさい」

彼女のことを諦めるべきなのか。彼女とサヨナラなのか。そんな事実はない、けれど。僕はもう、そこにはいられない――。

「哀しみの向こうに行くしかないというのなら、私も行きたいわ」

そんな言葉がどこかで笑顔と聞こえた。笑顔って音声になるんだって、思いながら泣いた。

「だけど、彼女も辛いと思う。彼女はもしかしたら騙さられて付き合っているのかもしれない」

でも、僕の時よりも笑顔が輝いていた。それは、最早、次に行く。それが単純で残酷な言葉だった。

「でも、僕の時の笑顔を思い出してくれる？ 君が僕に笑いかけてくれたことを覚えてる？ 君を始めて抱き締めた時を思い出してくれる？」

彼女は僕の傍を通り過ぎた。言葉が聞こえた。談笑か、諦観か。そつと囁かれた。

「あなたに出会って幸せだったよ」

それは、偶然に立ち会わせていた僕にか。それとも、もう隣を歩いている誰かだろうか。

「でも、これだけは覚えている」

その声音は確かに僕のためのものだ。だから――。

「録音してよかったな。なら、これからは彼女の思い出をこれに全て記録しよう」
自分の物語が始まった感覚があった。そして――。

「僕は笑いながら」

彼女の名前を呟いた――。

不思議なものだ。私の心は踊ることしか知らない。

「どうした。なにがあった。私で答えることが出来るのなら、出来ないと言おう」

いや、じゃあ、意味ないじゃん。君は何を言っているのかな。

「このシリーズに意味を求めたらだめだとおも@う」

今凄いこと言ったね。

「決してすごいとは言わない。それは決してなのだから」

意味がわからないことが最後の確定だと知ったあの日から、僕は喜びながらもおも@った。

「だから、君は何を言っているのだ」

いや、立場逆転してませんか？ 私のことを知っているのは彼女であり、彼女だということは
プロットということなんですよ。

「星屑だけの世界で。僕たちの星屑はそこまであるわけではない。だから、知っても知らざる

者。この世に参れ」

誰に何を言っている。というか、これは漫才形式と思っていいいのかね？

「いや、それは読者のみぞ知る」

じゃあ、作者はどう思っているんだろう。

「それこそ、私の使命じゃないか！　とか思ってるし。星を数えるぐらい暇な天文学、なわけありません」

いや、あなただれにそんなことを断定しているの？

「さあな。私にはわかるまい」

わかれ。

「わからないものを無理やり理解したいことがあつてあのときのことはもう思い出せないからへえ。そうなんだ。

「どつちにしろ、全てが終わったということだな。私は星屑のソテーを頼むよ」

それ、よく出るよね。

「まあ、注文したいから注文したということに落ち着かなければ、所詮貴様は所詮なんだへえ。そうなんだ。

「同じく、この私、小野さんには二人の兄がいる」

自分をさん付けする、気持ち悪い人がここに。

「気持ち悪いのは元々だ。だって、君が悪いんだから」
ええー。そんなことないと思うんだけどな。

「そうなのかい？ 君は最近ワインに凝っているらしいね」
別にソムリエに成りたいから鍛えているわけじゃ西。

「だから、君は時々面白いことを言う人だとは認識していないんだから」
そうなの？

「そんな顔で見ても！」

どこかで聞いたことのある言葉だな。まさに我が望んだ答を貴様は知っているのか！
「し、知らないよ。僕がそんなことするわけないし」

で、でも！ 君が我が望んだ答は全世界に一人しかいない！

「僕じゃない！ 貴様だ！」

なぜ、そのようなことを言えるのか我が証明してやろう。

「望むところだ！」

とまあ、言ってみたものの、何から始めればいいのかがわからず、ただ、僕の心に残ったあのときの感情は今でも覚えているよ。

「永い。そして意味がわからない」

そして、僕は、あのときのことを思い出さなければ、何も出来ないことに気付いた。

「それは、とても大切に」

それがとても大切で。

「だから、無駄なことからは始まることなんて知っていたんだから」

いつしか、僕たちを呼ぶ声が聞こえた。

「それは、架空か虚空か。知っていた言葉は必ず虚しく」

そして、僕たちのことを考えていた人の言葉は、もういない。

「そんな大切なことをどうして教えてくれなかったの？」

僕は、僕だよ？ あなたはあなただよ？

「それだけのことに僕はどうして君を知っていたのだろう」

知っていた事実から始まった向こう側に在る屋敷を求めた。それでも、そこには何もなかった。

「ああ、嘆息するしかない事実を目を背けることにもう終わってしまったのかもしれない」

そして、僕たちは――。

「いずれ、達することがあると信じて目の前のことに集中する」

それぐらいしかできない。

「けど」

それでいい。それでいいんだって自分に何度も言い聞かせる。

「それは、僕のことを忘れることなんて言っているわけではないけれど」

それでも、僕は前を向いて進んでいるんだって、気付いているから。

「いつしか聞こえた、あの日の鳥の鳴き声は今でも心に残っている」

そして、あのときから、僕の人生は始まったと。

「今でも、思っている」

もし、もしも。

「僕たちの全てを閉ざされても」

それでも、鳥が助けてくれる。

「それだけが全てだから」

ああ、始まるよ。

「うん、今から、行くから——」

そして。

「僕の人生の一步をようやく踏めた」

そんな気がしたんだ。

さて、始まってしまったお話はやはり、ラーメンとうどんがどれだけ勝負できるかが鍵ですね！

「何の話？ ラーメンとうどんに関係性を求めた時点で色々と負けなのは気のせいですかね」
だいじようぶ。その点も安心してくれ。

「いや、安心も何も。ラーメンとうどんの違いでも言えればいいの？」
いや、違うんだ。お話的にはうどんの勝ちと言いたいのだ。

「なぜに？ 僕は外国と本国が戦っているようにしか見えないよ？」
だから、うどんが狩ったんだよ。

「そうじゃなくて。ラーメンっておじさん、一兆上がりましたよ？」

な、なんですってー！

「そんな馬鹿な……。みたいなこと言えればいいですか？」

な、なんだってー！

「いやだから、二億はうどんだったんですけどね」
ど、どうして……。

「最早、何を貴方は言いたいのかがさっぱりでござんす」
ござんす。

「うん、ござんす」

な、んだと……！

「貴様こそやはり、星屑を見ていたんだ……。だからか、タイクーンというゲームをプレイ

してことがあったからか！」

うん、英語表記にしたらタイトルになるもんね。

「それと僕はラーメンとうどんが喧嘩しているところなんて見たくない！」

ラーメン横丁に謝れ！

「なんで!? 貴様は星屑すらも触れることができないクズ野郎だろ！」

うどん一丁に謝れ！

「どこだ! そんなのは凍京に言って探して来い！」

君は誰だね。儂が来たからにはもう大丈夫だ。安心したまえ。

「安心できないから、あなたは呼ばなかったのに……。どうしてあなたは来てしまったの？」

大丈夫だ。安心するんだ。この儂がうぬの欲望を全て捨て去りましょう。

「なぜ、だ。私はただ、ラーメンを食べて、昔のように評価したい……。ただそれだけなのに」

でも、儂が食べた物は鼠色だったんだ。だから、それはラーメンではないと確信して、それで……。

「とりあえず、キャラが崩壊しているのは気のせいだけど。でも、美味しいお店に行ったらブログに書き込むじゃない! なのに、魔術の世界では必ず毛髪を必要とすることが今でも、哀しい思い出になっています。それはただの愚行為。そして、そのブログを炎上させてしまった目的でただただ、寝かせていた原稿をようやく脱稿できる。それだけは、それだけは、貴様

に許すことはない！」

な、何故だ！ 貴様が欲しかったのはざるそばではなかったのか！ うどんなんて間違いは誰にでもある！

「いや、ない！ そんなうどんとラーメンを間違えるなんて！ 普通では有り得ないんだ！ だから、貴様が如何に謝ろうと、この気持ちは本当なんだ！」

くそ、儂の力を以てしても、うぬに勝てない？ そんなバカなことがあるか！

「ははっ。所詮、じいさん。アンタの力じゃ私に勝てやしないよ。そんなことを信じるアンタにはラーメン横丁にも行けないからな」

何故だ、ナゼだ、なぜだ、何故だ！ 儂は！ 私はある！

「じいさん。所詮あんたは紛い物さ。美しくも儂く散っていったあいつらの為に懺悔でもするんだな。永遠に許されない罪を犯したことをここに記録する。それであんたは消える。そして俺は遂にラーメンが食べられるということだ。はっはっは！ あっはっはっは！」

くそお！ 私が、私がうぬに負ける奇跡なぞ存在しないのに！ なぜ、何故この未来は貴様を救う！ 答えろ！

「そうか。知りたいのか。ならば教えてやろう。お前は確か、ざるそばと言わなかったか？」
はっ！ まさか……。

「そうさ。それが貴様の全ての勘違いと悲劇を産んだんだ。お前には説明しなくてもわかるだ

ろう！ 私が外国で貴様が本国であるという現実から目を背けていたのは貴様だったということだ。わかったか？ ならこの数珠を持って星屑に帰るな！」

儂は、私は、俺はああああ！

「そして、僕は勝った。どうやら、彼はこの星にぎるそばで食卓の世界を支配したいと最後に叫んだらしい。だが、俺らには、そんなことで屈しない。なら、やることは一つ」

食卓の平和を望みし者に全てを。

「僕たちの闘いはまだまだ終わらないからだ！」

さあ、好きだけ語ったお話の意味不明さをまたぶちまけた会話文と地の文シリーズも何作目か覚えていません！

「とにかく、先に後書きと言ってくれ。意味不明な展開はいつものことだろ」

いや、そうなんですけど。でもね、最後のお話辺りの食卓の平和の話あんじゃん？

「そうだな。元ネタがあるとか言われても誰もわかるわけがないぞ？」

うん、なんかの記事に書かれていた、人生という名のレースはどのこの、って内容だったけど。

「それは、わかる人にはわかってくれ？ 的な感じか」

そうだね。でも、そのために一番最後まで引っ張ってくんのもありかなあ？ とか思ったけ

ど、特に構想はありません。

「とういかさ、このシリーズ、もう何年間やってんだろ」

作者の趣味爆発だもんね。厨二病らしきものも多分に含まれている意味不明さが香るこの作品を買ってくださる方はホント御の字ですよ。

「買う人、ある意味勇気いるからね。でも、安けりや買うんじゃない？」

どうだろう。安いから買うっていう発想って意外と成立しないんだよな。

「そうなの？」

そう。だって、安いとはいえ払うわけだからなあ。ポイントとかで買えるんならまだ違うんだろうけど、お金を使うってことはそういうことだってことも理解しているつもりではあるんだが。

「高くても買う人は買うことで合っているかい？」

合ってる。でも、ホント、このシリーズは毎回読み切りみたいな感じでやっているから続編って言い方も変だし、しかも地の文と会話文以外のルール無視ってとんでもなく凄いよな。

「とにかく、意味不明なノリを如何に意味不明に書くがこのシリーズのモットーだとは思ってる」

そうかもな。まあ、こんな感じで良いんじゃないか？ 今回の後書き的なものは。

「そうだね。じゃあ、読者の皆さん！ また、違う作品でお会いできれば幸いかと存じ上げま

す」

じゃあ、最後にキメ台詞を！

「意味不明は永遠に不滅です！」

聞いた俺が馬鹿だったよ……、とまあ、こんな感じなノリで進む作品を次回も買っていただければ幸いなのは同じ意見です。ですの、面白い！ 楽しい！ とか、意味不明だ！ 買つて損した！ とかでもいいんで、何かしらの感動があればこれ幸いです。

「では！ 次回の作品でお会いしましょう！」

まったねえ〜。